

クツワムシ



法勝寺高校跡地にて

(撮影：桐原佳介)

■童謡「虫のこえ」

あれマツムシが鳴いている
♪で始まる文科省唱歌「虫のこえ」は、1番なら暗唱できる方も多いのではと思えます。ガチャガチャガチャガチャクツワムシ♪は、2番の冒頭で登場します。体長約5センチ。キリギリスの仲間の日本固有種であるこの虫は、大

きさも鳴き声もひと際存在感があります。迫力のある姿とは裏腹に、この仲間としては珍しくベジタリアンで、クズの葉っぱが大好物。「枕草子」でもその名が出ている程、平安時代から日本の秋の鳴く虫として身近な生き物だったようです。

■分布拡大中？

私が南部町内でこの鳴き声を初めて聞いたのは、平成20年の秋でした。他の鳴く虫が町内で普通に聞ける中、なぜかクツワムシの声はなかなか確認できなかつたのですが、やっと法勝寺川河川敷で音色を耳にすることが出来ました。その後、徐々に鳴き声が増える範囲が広がり、昨年はついに自宅そばからも聞こえるようになりました。少なくとも3年かけて、法勝寺地区から鴨部まで生息域が広がったようです。今年もどこの地区で鳴いているか、注目したいものです。

■豊かさを示す秋のBGM

「虫のこえ」に登場する全ての音色を、南部町内で聞くことが出来ます。歌では5種が歌詞に使われていますが、実は「秋の鳴く虫」は、町内だけでも40種類以上が生息しています。それぞれの種類が、草藪や、木々の枝先、乾燥した空き地など、好みの場所でお嫁さん募集中と必死に鳴き合っています。恐竜時代などは、現代とは違う虫の音が響いていたかもしれません、今となってはそのナマのBGMを蘇らせることは不可能です。今、私たちと共に同じ時代に生きている彼らの歌声は、生き物たちの進化の歴史が生み出したネイチャーサウンド。中には、ちよつと騒々しい種類もあるかもしれませんが、この秋、お住まいの地区でどんな虫たちが夜のオーケストラを奏でているか、耳をすませてみませんか？

自然観察指導員 桐原真希

祐生出合いの館【緑水湖畔】インフォメーション ■開館時間：9時～17時 ■休館日：毎週火曜日

大正12年(1923)8月23日、旧盆12日の忙しく暑い中、シカゴ大学人類学教授F・スター博士が来日され、板祐生宅に一夜されました。祐生はこの時の顛末を愉快的表現でまとめています。スター博士は、法勝寺まで自動車でした。法勝寺の宿では正月の御輿と落合から曳き出した大太鼓(鑿)をご覧に入れました。そこから先は人力車で祐生宅に向かいました。この時の俵賃が普通1円なのに、3円要求したと祐生は憤慨しています。行列の中には浅沼西伯郡長もおられ、祐生は恐縮しました。徳長公会堂で休憩しましたが、そこには泥絵具で描かれた古風な五月幟が数本立てられていました。(以下次号につづく)

